

# ジョン・ウィルキンズの分析言語　　ボルヘス

『大英百科事典』（エンサイクロペディア・ブリタニカ）十四版は、それまで収録されていたジョン・ウィルキンズの項目を省いている。項目は二〇行からなる伝記的内容のものである——ウィルキンズは一六一四年に生まれ、一六七二年に亡くなった。ウィルキンズはファルツ選帝侯チャールズ・ルイス（\*）の私設牧師を勤めた。ウィルキンズはオックスフォード大学某学寮の学寮長に任じられた。ウィルキンズは英国王立協会（ロイヤル・ソサエティ\*）初代の事務局長であった、等々。項目がこのように瑣末なものであったことを考えると、省略は正当である。けれども、われわれが彼の理論的仕事を考えると、それはそうではない。彼は愉快な好奇心に富んでいた。彼の関心は神学、暗号書記法、音楽、蜜蜂の透視巣箱の作り方、見えない惑星の軌道計算、月世界旅行の可能性、国際語の可能性とその原理などにおよんでいたのである。彼はこの最後の問題に、『真正の文字と学問的言語のための試論』（四つ折判六〇〇頁、一六六八年）なる一書を献じた。わがアルゼンチン国立図書館にはこの本がない。この記事を書くために、わたしは以下の諸書を参照した。P・A・ライト・ヘンダソン『ジョン・ウィルキンズの生涯と時代』（一九一〇年）、フリッツ・マウトナー（\*）『哲学辞典』（一九二四年）、E・シルヴィア・パンクハースト（\*）『デルフォス』（一九三五年）、ランスロット・ホグベン（\*）『危険な思想』（一九三九年）。

かつてある女性を相手に言語談義を始めたことがある。間投詞と破格文をふんだんにまき散らしながら、彼女は、*lingua*の方が、*lingua*より表現力に富む（逆だったかもしれない）と主張して、こちらの言うことなど頑として受けつけない。こうした決着のつけようのない論争で閉口した覚えは、誰しも一度は経験のあることだろう。極めて単純な「月」なる物体を表わすことばとして、一音節語、*luna*よりも一音節語、*moon*の方が適しているのではないかという自明の発言を別にすれば、こうした論争によって得られるものは何もない。複合語や派生語を除いてしまえば、世界の全ての言語（ヨハン・マルティン・シユライアーの《ヴォラピュック》（\*）《ヤジュゼツペ・ペアノのロマンス語風な国際語》《インテルリಂಗア》（\*）《も含め》）は、どれも特に表現力豊かという訳ではない。スペイン王立言語アカデミー（\*）の刊行になる『文法』はどの版も「わが豊かなスペイン語は生新適確にして表現力に富む語彙に恵まれており、この宝庫は諸国民羨望の的である」と謳うが、これは確証のない単なる空威張りにすぎない。スペイン語の語句を定義するため、王立アカデミーは数年おきに辞典を刊行する。十七世紀半ばウィルキンズが考案した世界語においては、各々の単語はひとりで定義される。すでに一六二九年十一月付の手紙のなかで、デカルトは十進法を使えば、万物の命名法と新しい言語、つまり数字言語（1）を使ったその書記法をたったの一日で覚えられると記している。彼はまた、人間のあらゆる思考を組織し包含するような、類似の普遍言語の創造を主張した。一六六四年ごろ、ジョン・ウィルキンズがこの課題に着手した。

ウィルキンズは宇宙を四〇のカテゴリーないし《類》に分けるが、《類》は《差》に、《差》はさらに

《種》に分かたれる。おのおのの《類》には、一文字の単音節語があてられ、おのおのの《差》には子音、おのおのの《種》には母音があてられる。こうして、たとえばdeは四大を、debは四大の最初である火を、debaは火の一部をなす炎を意味する。ルテリエが考案した類似の言語（一八五〇年）では、aは動物、abは哺乳動物、abiは草食動物、abivは馬科の動物、avoは肉食動物、ahojは猫科の動物、abojieは猫、等々を意味する。またボンファシオ・ソトス・オチャンド（\*）の言語（一八四五年）では、imabaは建物、imacaは娼家、imafeは病院、imafioはペスト避病院、imariは家、imaruは別荘、imedeは大柱、imedoは支柱、imegoは床、imeliaは天井、imogooは窓、bireは製本職工、birerは「製本する」を意味する。（この最後のものは、ブレンスアイレスで一八八六年に出版された一書（ペドロ・マーク博士『世界語の発展』）のなかで見つけたものである。）

ジョン・ウィルキンズの分析言語で使われる語は愚かしい恣意的記号ではない。カバラ学者にとって聖書の文字が意味をもっていたのと同じように、語を形成するおのおのの文字は意味をもっている。マウトナーは言う——子供たちは人工語とは意識せずにウィルキンズの分析言語を覚えることができる。後年学校に行くようになってから、彼らはそれが世界を開く鍵であり、秘密の百科辞典であることを知るだろう、と。

ウィルキンズの方法を定義したあと、繰延べにすることができない、またはむつかしい一つの問題——この言語の基礎になっている第四〇表の意味——が検討されねばならない。石をあつかった第八類を

考えてみよう。彼はそれを次のように分類する——普通（燧石、砂礫、粘板岩）、中間（大理石、琥珀、珊瑚）、貴重（真珠、蛋白石（オパール）、透明（紫水晶、青玉（サファイア）、不溶（石炭、粘土、砒石）。第九類も第八類同様に驚くべきものだ。ここでは金属が次のように分類される——未完（辰砂、水銀）、人造（青銅、裏盆）、废物（鑪屑、錆）、天然（金、錫、銅）。鯨は第一六類に現われるが、それは長方形の胎生魚である。これらの分類に見られる曖昧・重複・欠点は、フランツ・クーン博士（\*）が『善知の天楼（\*）』なる中国の百科辞典について指摘したのと同じ特徴を思いおこさせる。この遙か彼方の書物では、動物は次のように分類されているのである——a 皇帝に帰属するもの、b 芳香を発するもの、c 調教されたもの、d 幼豚、e 人魚、f 架空のもの、g 野良犬、h この分類に含まれるもの、i 狂ったように震えているもの、j 無数のもの、k 立派な駱駝の刷子をひきずっているもの、l その他もの、m 花瓶を割ったばかりのもの、n 遠くで見ると蠅に似ているもの。ブリュッセル書誌学会の分類も出鱈目なものだ。宇宙は一〇〇〇の項目に区分されているが、一六二番は教皇、一八二番はローマ・カトリック教会、一六三番は主の日（日曜日）、二六八番は日曜学校、二九八番はモルモン教、二九四番はバラモン教・仏教・神道・道教にそれぞれ照応するといった具合である。ここでは異質な内容からなる項目も容認されており、たとえば一七九番は次のようになってい——「動物虐待、動物保護、決闘と自殺の道徳的含意、諸種の悪徳と欠点、諸種の美德と美点」。

ウィルキンズ、無名の（または非公認の）中国の百科辞典編纂者、ブリュッセル書誌学会、それぞれに見られる恣意性についてわたしは述べた。明らかに、宇宙の分類で恣意と臆測に基づかないものは一

つとしてない。その理由はきわめて簡単で、われわれは宇宙が何であるかを知らないからである。「この世界は」デイヴィッド・ヒュームは書いている、「ある幼ない神が創ろうとして果さなかつた最初の試作品である。彼は自らの幼稚な仕事ぶりを恥じて投げ出してしまったのだ。それとも、それは半人前で二流の神の作品で、先輩たちの嘲笑の的になつたものだ。さもなければ、それは年寄つて耄碌したよぼよぼ神の製品で、その神の死後もまだ生き残つている……」(『自然宗教に関する対話』Ⅴ、一七七九年)。われわれはもう一歩徹底させて、宇宙なる野心的言葉には、有機的統一の意味での宇宙などありはしないと考へねばならない。もしあるとすれば、われわれはその目的を臆測せねばならぬし、神の秘密の辞書に録された言葉、その語義と語源を臆測せねばならぬからである。

われわれは宇宙を創造した神の計画を測り知ることはできない。しかしだからと言って、人間によつて試みられた一連の計画について一瞥しておくことまで諦める必要はないし、われわれはそれらが暫定的なものに過ぎないことを弁えている。ウィルキンズのアナリシス語は、こうした計画のなかで少なからず賞讃に値するものである。なるほど、それは相互に矛盾した曖昧な類と種からなつてゐる。しかし、項目と下位項目を示すために文字を使うやり方は、疑いもなく巧妙な趣向である。「鮭」なる語は、その指示する物体については何も教えてくれない。それに照応する zanna は(四〇のカテゴリーとそれからカテゴリーの分類に通暁した者には)、朱みがかつた肉をもつ有鱗淡水魚であることを定義している。(ある事物の名称を示すだけで、過去未来を問はず、その事物の運命の細部がわかるような言語を考察することは、理論的には不可能ではない。)

未来に対する希望や理想を別にすれば、これまで書かれた言語論のなかで最も明断なものは、たぶん次に引くチエスタトンのものである。

秋の森の色よりもさらに心を惑わせ、さらに名状しがたく、さらに数多くの色彩が魂にあることを人は知っている。……にもかかわらず、人はこれらの事物の一つ一つについて、人間の発する雑多な音声の窒息的体系によつて、その全ての全音と半音を、その全ての混色と調色を正確に表現することができる、と信じて疑わない。教養ある株式仲買人なら誰でも、彼自身の恣意的な音声体系によつて、記憶の神秘、欲望の苦悶をことごとく表現する内面的音声を生み出すことができる、と信じて疑わないのだ(『G・F・ウォッツ』一九〇四年・八八頁)。

## 註

\*チャールズ・ルイス ボヘミア王フリードリヒ五世と英国王ジェームズ一世の娘エリザベスの間の長子。

\*英国王立協会(ロイヤル・ソサエティ)イギリス最古の學術団体。一六四五年創設。

\*P・A・ライト・ヘンダソン 未詳。

\*フリッツ・マウトナー（一八四九—一九三三）ドイツのジャーナリスト、作家。パロディや諷刺に  
独得の才を發揮した。

\*E・シルヴィア・パンクハースト（一八八二—一九五八）イギリスのフェミニスト。

\*ランズロット・ホグベン（一八九五—一九七五）イギリスの自然科学者。専門的著作の他に、啓  
蒙的な科学書を書いている。

\*《ヴォラビュツク》ドイツ・カトリック教の聖職者シュライアーが一八八〇年に考案した国際語。

\*《インテルリング》イタリアの数学者・言語学者ペアノが一九〇三年に考案した。ラテン語の語彙  
と文法を簡略にしたもの。

\*スペイン王立言語アカデミー スペイン語を改良純化する目的で一七二三年創立。国語辞典（一七二  
六年以来）、文法（一七七一年以来）、古典のテクストなどを刊行している。

\*ポニファシオ・ソトス・オチャンド 未詳。

\*フランツ・クーン博士（一八一二—一八二一）ドイツの言語学者、神話学者。

\*「善知の天楼」未詳。

『ジョン・ウィルキンズの分析言語』ボルヘス 中村健二訳

（OCR読み込み。粗修正済み）